

追悼

## 野村純一先生

常光 徹

二〇〇七年六月二〇日、野村純一先生（國學院大学名誉教授・文学博士）が永眠された。享年七十二歳。本学会の創設に尽力され、その後、長く口承文芸研究をリードされるとともに、一九九五年から一九九年までは会長として重責を担われ、多くの業績を残された。

先生は一九三五（昭和一〇）年、東京の生れで、國學院大学に進学後、白田甚五郎先生から伝承文学、民俗学を学び、卒業後は高校の教員を経て母校の國學院大学で教鞭をとられた。学生時代から昔話を訪ねて各地を実に精力的に歩かれている。語り手の声に耳を傾けるなから蓄積してきた成果は、一九六七年の『吹谷松兵衛昔話集』を始めとして『笛吹鞆―最上の昔話―』（一九六八年）、『萩野才兵衛昔話集』（一九七〇年）、『五分次郎―最上・鮭川の昔話―』（一九七一年）、『関澤幸右衛門昔話集』（一九七二年）と立て続けに発表された。いずれも質の高い本格的な昔話の記録として貴重な仕事であるのはいうまでもないが、それにも増して、従来、等閑視されてきた昔話伝承の動態に着目し、

口承文芸研究の新たな地平を切り拓かれたことの意味は大きい。例えば『吹谷松兵衛昔話集』で、つぎのように述べている。

「一人のすぐれた語り手に邂逅した時に、それを契機として、昔話の伝承経路とか系譜とかを追究してみる。語りの消長や語りの環境とでもいえるものにも注意していく。今後における昔話研究には、こうした方が必須の要件ではないかと私は思う。その理由のひとつには、従来の昔話集の殆どが軌を一にして、特定の土地に伝えられている昔話を集めたものであったことによる。こうした方法は結果としてそれぞれの土地にはどのような昔話が語り伝えられているのか、また、どのような話種の濃淡を示しているのかという、話の分布圏・伝播状態を知るのには有力な手立てとなってきた。（中略）同じ立場からの採訪は、調査の密度を高めるのには利するものがあったても、新たな成果を期待するには自ずと限界が感じられてきたからである。」

こうした見地から、一軒の炉端に焦点を据え、語りの家筋や語り手の移動、語りの座の変貌と継承といったテーマに取り組み、口承文芸研究の新生面を拓かれた。それは「ある地域に伝承されてきた昔話の動態を単に平面的に認知するのではなく、直接・間接に伝承の内部事情に立ち入っていくことである」という先生の言葉によく示されている。

一九八四年にまとめられた『昔話伝承の研究』には、「（非日常の言語伝承―ハレの日の昔話―）と（日常の言語伝承―ケの日の昔話―）という二つの基軸を設定し、それまでの調査にもと

づく研究の成果が収められている。その後も、『日本の世間話』（一九九五年）、『昔話の森―桃太郎から百物語まで―』（一九九八年）、『新桃太郎の誕生』（二〇〇〇年）、『柳田國男未採択昔話聚稿』（二〇〇二）年、『江戸東京の噂話―「こんな晩」から「口裂け女」まで―』（二〇〇五年）などを刊行された。昔話研究はもちろんのこと、早くから世間話にも関心を寄せられ、刺激的な論文を数多く発表されている。たとえば、一九七九年の夏に口裂け女のうわさが日本列島を駆け抜け当時の小学生を震え上がらせたが、このうわさを逸早く取り上げている。現代の妖怪とでもいうべき口裂け女の話と伝統的な民俗文化の影響関係に鋭く切り込んだ新鮮な視座は、近年の都市伝説や現代伝説といった関心への先駆けをなすものといつてよいだろう。

今日、昔話を調査・研究する際に手許に置いて参照することの多い関敬吾博士の『日本昔話大成』（全一二巻）の協力者として、また、『日本伝説大系』（全一七巻）や『柳田國男事典』の編著者としても中心的な役割を果たされた。

こうした長年の研究により、一九八五年には『昔話伝承の研究』で第七回角川源義賞を受賞、二〇〇〇年には口承文芸学研究所の功績により紫綬褒章を受章された。さらに、先生の幅広い研究活動は口承文芸の領域にとどまらず、一九八九年から九二年までは日本民俗学会の代表理事として後進の指導にあたられた。

謹んで先生のご冥福をお祈りいたします。

（つねみつ・とおる／国立歴史民俗博物館）